アオアシナガハナムグリとジュウシチホシハナムグリの分布*

高橋　寿郎

アオアシナガハナムグリ *Gnorimus subopacus viridiopacus* (Lewis, 1887) とジュウシチホシハナムグリ *Paratrichius septecimguttatus* (Snellen van Vollenhoven, 1864) の両者は兵庫県下での記録は大変少ない。そこで、この両者の日本での分布状況はどんなであろうかと眺めて見ることにした。

まず、アオアシナガハナムグリから眺めて見る。アオアシナガハナムグリは1887年 G. Lewis が Chiuzenji, Nikko 産で *Trichius viridiopacus* Lewis として新種記載された。この原記載で *T. subopacus* を対馬から5頭得ている、そして、この種を朝鮮からも得ていると。上翅は緑色或いは褐色で胸部の色彩が異なるとしている。

1875年の C. O. Waterhouse の"日本産鰓角類"なる論文では *Gnorimus subopacus* Motsch. Chowsani, Tsu-sima の記録のみである。

Lewis がアオアシナガハナムグリを新種記載した同じ年(1887) "日本のハナムグリ, 新種, シノニムそして分布"なる論文を発表。その中で *Gnorimus viridiopacus* Lewis として夏の終りに中禅寺で3頭得たと書いており *G.subopacus* Motsch. について Mr. Bowring がずい分前に対馬から得ていたが、自分も1881年に同じ対馬で5頭得ており、また札幌から1頭得ているとも記されている。

即ち *G.subopacus* と *G.viridiopacus* は、あまりはっきり違う種であるとされないままた両者が日本に分布しているように扱われている。

1923年に発表になった新島善直、木下栄次郎両博士の論文では *Gnorimus viridiopacus* Lewis アオアシナガハナムグリとあり、産地として Tsushima, Chiuzenji, 日光、飛騨、天塩、上川、樺太とあり、ローマ字の産地は文献からの引用で検視標本が漢字で示されているようである。ここで検することの出来なかった種として *Gnorimus subopacus* Motsch. そして産地に Chousan, Tsushima, Sapporo としている。いずれも文献の引用である。

1930年代に出版された各種図鑑、横山(1931)、加藤(1933)、平山(1937, 1940)には皆アオアシナガハナムグリ *G.viridiopacus* の図説はある。そして産地は、北海道、本州、対馬(中には樺太、朝鮮も入っている)。また加藤正世の1935年の目録にはアオアシナガハナムグリ *G.viridiopacus* (樺、北、本)は入っているが *G.subopacus* が入っていない。

さらに1939年の三輪勇四郎、中條道夫両博士の目録では *G.viridiopacus* アオアシナガハナムグリ Japan。*G.subopacus* Motschulsky イブシアシナガハナムグリ Japan (Hokkaido, Honshu, Tsushima)、Corea、China、East Siberia とあって、この両者の取扱いが逆のような取扱いになって当時、この両者を的確に検討された文献が無くわかったようなわからないような処置のままになっていた。

戦後、1960年に野村 鎮によって発表になった目録にはアオアシナガハナムグリ *G.viridiopacus*, Hokkaido, Honshu, Kyushu, イブシアシナガハナムグリ *G.subopacus*, Tsushima? (ex. Lewis), Korea, Manchuria, E. Siberia と区別され、日本にいるのはアオアシナガハナムグリであり、対馬にだけイブシアシナガコガネがいるのではということになった。そのことは1963年の図鑑によっても解説されている。

その後出版された日本の図鑑類にはアオアシナガハナムグリがほとんど図説されているし、学名も安定している(一応日本での広域分布種である)。しかし、日本産のこの両者がすっきりしないことに気づいている人は多くいたと思われる。石田正明はこの両者と考えられるものを検討(1982)されて、両者に明確な区別点が見出せないとして、日本に産するものは *G.subopacus viridiopacus* Lewis と亜種に扱われ対馬にはたして *Gnorimus* 属の種がいるのかと疑問をなげている。即ち日本にはシベリア東部原産の *G.subopacus* の亜種 ssp. *viridiopacus* を産することになる。最近出版された Ma Wenzhen, Economic Insect Fauna of China

* 兵庫県甲虫相資料・329

Fasc. 46. Coleoptera:Cetoniidae, Trichiidae and Valgidae. pp. 1-210, pl. 5, 1995 をみると(p. 169-171, Fig. 141-143) *Gnorimus* 属は勿論日本にも分布種がいるとあるが、中国からは *G.subopacus* Motschulsky, 1860, *G.pictus* Moser, 1901 の2種が記録されており、しかも *G.subopacus* Motschulsky は日本に分布していないことになっている。こうなると、*G.viridiopacus* Lewis は独立種と云うことになる。しかし、石田が検討しているように *G.subopacus* と *G.viridiopa- cus* 両者の種として区別さるべき有意の差をほとんどもっていないと云った意見から *G.viridiopa- cus* を *G.subopacus* の亜種に扱うことは該当であると考えられる。

アオアシナガハナムグリの分布は現在では北海道、本州、四国、九州、対馬ということで関東から北の地では割合と見られるようである。手許にある文献によってこの種の分布をザッと眺めて見る。

樺太にいると云う記録は新島、木下(1923)の論文に出ているが河野広道、玉貫光一の報文では北樺太から記録され(1936)南樺太には多いような記述もある。千島からは桑山 覺博士が国後島から南千島初記録として報告されている(1967)。

北海道からの記録は1936年、河野広道が大雪山を同じく保田が層雲峡、ルベシナイモ(1985)、霧多布湿原、風間林道を中谷が(1993)しており、上杉博物館の所蔵標本の中に北海道福島町大千軒岳、上士幌町糠平産の記録がある(1994)。霧多布湿原周辺の丘陵地には多く花に集まるとの記述もある。

青森県では渡辺福寿の内真部砂川事業所(1937)と尾崎俊寛による南八甲田山駒ヶ峯地区猿倉がある(1992)。

山形県の記録は大変多く見られる。即ち吾妻山(白布高湯)、蔵王山(清水)雁戸山、二口峠、山形市(盃山)、最上郡(神室山)、鳥海山、以上板垣(1964)による。奥会津や奥日光では比較的多いようであるが当地では個体数の少ない種であると云った記述もみられる(草刈、1991)。同じく山形県の記録としては朝日山系：祝瓶山、月山：湯殿山口、吾妻山：大平、吾妻：白布高湯、蔵王：清水、山形市：雁戸山、二口峠、盃山、神室山、鳥海山(桜井、1984)並びに米沢市新高湯、口田沢、小国町温身平(草刈、1994)もある。

秋田県、岩手県での文献が手許になく、おそらく産すると思われるがよくわからない(竹内誠一の岩手県甲虫誌・1939には確か記録があったと記憶しているが今この文献手許になく、よくわからない)。

宮城県では二口峠(渡辺 徳、1983)の記録があるが産出状況は記されていない。新潟県ではEchigo:Miomote, Mt. Monnai, Renge spa. が記録されている(中根猛彦・馬場金太郎, 1960)、また胎内川流域(馬場金太郎, 1972)の記録もある。

茨城県では山地稀という記録があり(日置正義, 1973)、他に産地とかコメントのついていない記録もある。

群馬県では古く熊ノ平産のカラー図説があり(平山修次郎, 1937, 1940)、尾瀬の記録もある(中根猛彦, 1954)。

神奈川県では小田原、箱根、小田原・駒ヶ岳、丹沢・蛭ヶ岳の記録があり、少ない種であるとさ

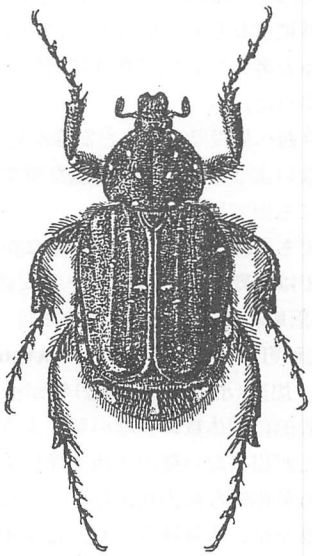

Рис. 817. *Gnorimus subopacus* Motsch. ♂

Fig. 1. Fauna U. S. S. R. Scarabaeidae by Medvedev Vol. X, No. 4(No. 74), p. 329, 1960 より

Gnorimus subopacus Motschulsky.
イブシアシナガハナムグリ
日本産は subsp. *viridiopacus* (Lewis, 1887)
アオアシナガハナムグリ

れている(平野幸彦, 1981)。

山梨県韮崎市鳳凰山の記録がある(水野弘造・細田偉市, 1991)、高羽正治による石川県の記録はあるが産地名とか産出状況がわからない(1992)。静岡県の記録もあるが、産地名とか産出状況の説明がない。

愛知県では東三河：設楽町裏谷、豊根村黒川の記録がある(松野更一ほか、1990)。

福井県では大野市：小池、今庄町：夜叉ヶ池の記録がある(佐々治寛之・斎藤昌弘、1985)。

三重県、奈良県両方にまたがっている大台ヶ原には記録がある(山下善平ほか、1972, 林 匡夫、1955。

和歌山県下では北山村、護摩ノ壇山清水町が記録されている(的場 績、1994)。

兵庫県は後で述べるとして中国地方はどうであろうか。まず鳥取県八頭郡智頭町の八河谷～綾木谷川流域、八河谷、芦津～北投川流域にはアオアシナガハナムグリが極めて普通に生息しているとある(恩藤芳典・江原昭三、1974)。鳥取県の記録はこれ以外には見られなかった。伯耆大山あたり当然産すると考えていたが意外に記録を見ることが出来なかった。

もう少々西へ島根県に行くと記録が見られるが、わりと少ないようで1995年の貴重な野生動物のリストの中にも出ている。

岡山県でも記録を見ることが出来なかった。

広島県では高野町(小田脇康行・須安貞荘, 1965)、十方山(小阪敏和, 1970、赤木克己, 1989、竹下 富, 1933)、比和町(中村慎吾, 1977)、臥竜山(小阪敏和, 1973)、加計(小阪敏和, 1972)等が記録で見られるが全般的に個体数の少ない種のようで、あまり見ることが出来ない種の印象を受けている。

山口県も具体的な産出状況はわからなかったが寂地山、莇ヶ岳、木谷峡５～６月と産地が示されている。一般に中国山地は鳥取県の東端を除けば、かなり少ない種の一つに思われる状況である。

四国では、まず三宅義一等による(1958)、徳島県の剣山夫婦池、剣山大剣神社がある。矢野俊郎はそれ迄(1961)の四国での記録をまとめて発表している。即ち徳島県：剣山(大剣神社)、夫婦池、見ノ越、高知県：梶が森、愛媛県：面河山、皿が嶺、石鎚山とある。面河渓は石原保博士等の記録(1953)が引用されている。その後小島圭三博士は高知県天狗高原から記録(1963)、坂口清一は徳島県剣山を記録(1989)している。四国はいわゆる石鎚山と面河渓で代表される地域の山地には広く分布しているようであるが、個体数はそれほど多くないようである。

次いで九州であるが、九州での記録は英彦山がある。高倉康男の「福岡県の甲虫相」でも英彦山釈迦岳の記録のみが示されている(1989)。

三宅義一は1957年祖母山系に産し久重山系から見出し得ない種類として、このアオアシナガハナムグリをあげている。九州全般での文献がほとんど手許にないのではたしてアオアシナガハナムグリの記録があるのかどうか良くわからなかった。あったとしても、やはり北方系の種であるアオアシナガハナムグリの九州での分布は極めて珍しいのではないだろうか。霧島山での記録はある(中島義人, 1968、清水 薫, 1969)。対馬にしてもはたしてアオアシナガハナムグリ、イブシアシナガハナムグリが現在分布しているのかどうかはっきりとしていない。おそらくアオアシナガハナムグリは九州では大変珍しい種の一つと考えても良いのではないだろうか。

以上大雑把にアオアシナガハナムグリの分布状況を眺めてみたが山地性、北方性(関東地方では大体1000m位のところからあらわれると云われている)の種類と考えられる種である。

さて、兵庫県でのアオアシナガハナムグリの記録であるが、山本義丸が氷上郡神楽村で採集した１頭が記録された〔1952, 1958〕。それが現在に到る迄の県下での唯一の記録になっていた。氷の山、扇の山の両側の地域には、本種がわりといると云った記録があっても県下での本種の記録はこの１例だけと云った大変淋しい結果になっていた。

ところが1995年になって1989年の１年間林 靖彦他10名の人々(大阪甲虫同好会のメンバー)による多紀郡雨石山においてのトラップによる調査以外に甲虫相の調査を５，６月と９月に月２回ずつ実施。それらにて得たる種名確定の450種のリストをまとめたものが送られてきた。その中でアオアシナガハナムグリが１頭採集出来ている記録を

見ることが出来た。実に山本義丸の採集品からして31年を経て採集出来たことになる。採集の状況がよくわからないが1989年5月14日に得られているから、この種はかなり早く野外にて見られる種であるとうかがえる。一般的には高度1000m位から現れると云ったことが報告されているが、この雨石山の標高は630mであるから大変低い。出現期の早いのもそのあたりのことと関連があるのかもしれない。どちらにしても兵庫県の中央部にて採集記録があるが音水、赤西、氷の山、扇の山付近には必ず本種はいることと思われるので、これからの調査に期待することが大である。もっと広く個体数も多く産するであろうと考えてよいのではないだろうか。

さて次はジュウシチホシハナムグリ *Patrichius septemdecimguttatus* (Snellen van Vollenhoven, 1864) のほうであるが残念なことにこの種の原記載を持っていないので日本のどこで採集されたものであるのか、また誰が採集したものであるのかと云ったことが全くわからない(どうもシーボルトが採集して持って帰ったものではないのかと云った気がしないでも無い)。

1875年に Waterhouse が"日本の鰓角類"をまとめて発表した論文の最後の所で本種の全形図をつけて記載をしている。その最後の所で長崎近くの Tomatru からのみ5月に4頭得たとあり、6年間の探索の結果とも記している。また♂♀に関係なく赤色を呈したものがいるとあり、Lewis の1頭は胸部赤色で前縁は黒色を呈しているとも記している(この色彩の点は♂では赤褐色のものと黒色のものとがいるが♀では黒色型のものだけのようである)。

1887年の Lewis の論文ではジュウシチホシハナムグリは九州からのみ産する。1881年5月19日 Konose(神瀬)のガマズミの花からわりと見ることが出来、古い丸太の穴(横)から同じ日20頭採集内5頭は全体赤褐色であったとある。

1923年発表の新島善直・木下栄次郎両博士の論文は新に産地として日向、豊後、熊本が加わっている。1930年代に出版された図鑑類に本種はまだ図説されることが少なかった。その中にあって平山修次郎の原色千種続昆虫図譜(1937)には熊本県阿蘇山産のものが図示され分布として九州と朝鮮のみを掲げている。この図説はそのまま1940年の原色昆虫図譜にも収録されている。

1937年沢田玄正は九州以外の産地を紹介された。即ち九州若杉山、屋久島、阿波祖谷渓谷、土佐黒尊、奈良県吉野郡北山地方池峰、大台ヶ原である。

本種は本州では関東以西に分布している種となっている。即ち神奈川県昆虫調査報告書には出てこなかったが多比良嘉晃の静岡県からは記録がある(1989)。

石川県での記録もある(高羽正治, 1992)。福井県では大野市刈込池のみである(佐々治寛之、斎藤昌弘, 1985)。岐阜県の河合村角川の記録もある(鳥飼兵治, 1974)。

愛知県では富山村漆島、日本ヶ塚山、東栄町鴨山林道、東栄町桑原とあるが、いずれもあまり多いといった表現は見られない。三重大学の平倉演習林にもおり大台ヶ原の記録もある(1968, 1972)。

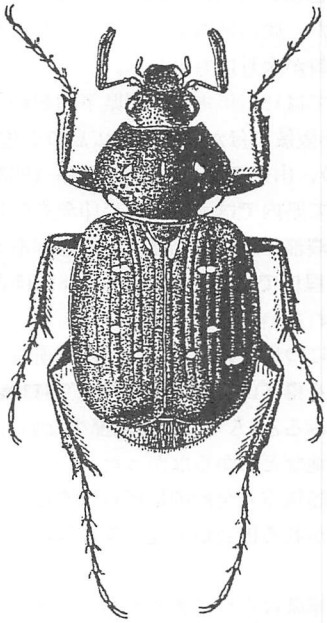

Рис. 816. *Gnorimus septemdecimguttatus* (Snell.)

Fig. 2. Fauna U. S. S. R., Scarabaeidae by Medvedev Vol. X, No. 4(No. 74), p. 327, 1960 より

学名は現在 *Paratrichius septemdecimgurratus* (Snellen van Vollenhoven, 1864)
ジュウシチホシハナムグリ

また大阪府立大学生物研究会の伯母子岳(奈良県)生物相調査報告書でこの種を記録されている(山本雅則, 1979)。的場 績は和歌山県下の記録をまとめられている(1994)(北山村, 那智山, 串本町, 護摩ノ壇山, 高野山)。中国地方に入る前に四国を眺めてみる。四国でのジュウシチホシハナムグリの産地はアオアシナガハナムグリとほぼ同じような地点ということになる。三宅等による名西郡高根・旭ノ丸、神領村大久保鉱山橋下(1958)、石原等による面河渓、成就社(1953)、高知県天狗高原(小島圭三, 1963)、矢野俊郎による四国での既知記録の紹介(1961)でも同じような産地になっている。ただ四国ではアオアシナガハナムグリに比しジュウシチホシハナムグリの方が産地が少ないような印象を受けるが、どんなものであろうか。

中国地方では鳥取県では伯耆大山の記録はあるが県全体を見た場合他に産地の記録がみられない。あまり目に出来ないようである。岡山県ではこの種の記録は山地 治による苫田郡三ヶ上が1カ所だけあった。岡山県内でどのような分布をしているのか資料が余りにも少ない。

広島県では1977年本串山で県下初記録というのがある(小阪敏和ほか, 1977)。広島市安佐町(清水健一ほか)、山県郡深入山(小阪敏和, 1988)と散発的な記録で県内では大変少ない印象を受ける。島根県も美濃郡匹見町裏匹見での記録があるのを知っている程度で(福井修二ほか, 1989)ほとんど記録がみられない。

山口県についての文献はほとんど所有していない。止むを得ず山口県立博物館の"山口県の昆虫"(1988)をみると"5～6月山間部少ない"とあるだけで記録地などわからなかった。

以上中国地方も全般的に産しはするが、かなりお目にかかれる機会が大変少ない種の1つのようである。

さて兵庫県はどうであろうか。今までの記録のあるのは美方郡扇ノ山広留野、宍粟郡坂の谷林道(高橋寿郎, 1981)、その後扇の山、氷の山地域で本種が採集されているのかどうか筆者は知らない。恐らくこのあたりには個体数は多くないとしても産することは間違いないであろう。大体本種は日本では紀伊半島と屋久島のある地点でかなりの個体数が見られるほかは、それほど多くみられる所はないようで分布が広い割に個体数の少ない種といえるかと思う。国外では朝鮮半島と中国大陸に分布している。(尤も M. Wenzhen, 1995 によれば *Paratrichius* 属の種は中国では13種も分布しており、このジュウシチホシハナムグリもわりと中国では広く分布しているようで、もちろん日本にも分布しているがなぜか朝鮮に分布は示されていない)。どちらにしてもコガネムシの中ではそう簡単に接する機会の少ないコガネムシといえるかと思う。

<参考文献>

参考文献は大変多い。此処には全部掲載していないことをお断りしておく。

赤木克己(1989) 標本箱の中から 広島虫の会会報(28):39

馬場金太郎(1972) 胎内川流域の鞘翅目 飯豊山塊・胎内渓谷の生物:195-240

福井修二・鬼頭 剛・鈴木謙治・山崎克友(1989) 匹見丘の鞘翅目(2) すかしば(31):13-18

林 匡夫(1955) 大台ヶ原・大杉谷の甲虫類 大杉・大台ヶ原の自然科学調査:35-39

林 靖彦ほか(1995) 1989年度雨石山に於ける甲虫相調査報告書 KASUGA(大阪甲虫同好会連絡誌)No. 11:1-25

日置正義(1973) 茨城県のコガネムシ るりぼし(1):2-3

平間祐介・中谷正彦(1993) 霧多布湿原の甲虫相 第4節鞘翅目(甲虫類) 霧多布湿原の昆虫 Sylvicala 別刷:35-38

平野幸彦(1981) 神奈川県の甲虫 神奈川県昆虫調査報告書:296

平山修次郎(1937) 原色千種続昆虫図譜(三省堂・東京)

平山修次郎(1940) 原色甲虫図譜(三省堂・東京)

保田信紀(1985) 上川町(大雪山、石狩川源流地域)の甲虫類 第X報(総目録) 上川町の自然;生物目録集:111-167

石田正明(1982) イブシアシナガハナムグリとアオアシナガハナムグリについて 北九州の昆虫:29(1)1-4, pl. 1.

石原 保その他(1953) 石鎚山と面河渓の昆虫相 四国昆虫学会会報:Vol. 3:1-137, 8pls. (ref. p. 70)
板垣輝彦(1964) 山形県産甲虫類の分布資料 山形昆虫同好会会誌 2(1):4-7
神谷寛之(1959) 英彦山昆虫目録Ⅱ:鞘翅目:25 (九州大学英彦山生物学研究所刊)
加藤正世(1933) 原色日本昆虫図鑑 第八輯(厚生閣・東京)
加藤正世(1935) 主要金亀子科の分類(4) 昆虫界 3(18, 19):342-349
小島圭三(1963) 県立自然公園天狗高原学術調査報告書:113-174(ref. p. 170)
河野広道・玉貫光一(1926) 北樺太の甲虫類に就て 動物学雑誌 38(435):276-296
河野広道(1936) 大雪山の甲虫類 Biogeo graphica 1(2):75-104, pl. X
小阪敏和(1970) 広島県産甲虫ノート(4) 広島虫の会会報(10):335-338
小阪敏和(1973) 会員の採集活動 広島虫の会雑報(25):14
小阪敏和(1973) 広島県産甲虫ノート(7) 広島虫の会会報(12):67-69
小阪敏和(1988) 広島県産甲虫ノート(11) 広島虫の会会報(27):37-42
小阪敏和・村上貴望・角島幸二(1977) 広島県産甲虫ノート(8) 広島虫の会会報(16):187-191
小阪敏和・清水健一・村上貴望・矢野立志(1988) 昆虫類 広島市の動植物:167-193
草刈広一(1991) アオアシナガハナムグリ(コガネムシ科) ファウナウキタム(9):29
桑山 覺(1967) 南千島昆虫誌(北農会刊)
G. Lewis (1887) Notes on a new species of Osmoderma and a Trichius from japan. Wiener Ent. Zeit., Ⅵ(2):49.
G. Lewis (1887) On the Cetoniidae of Japan, with Notes of new Species, Synonymy and Localities. Ann. Mag. Nat. Hist. XIX(5):196-202.
的場 績(1994) 和歌山県産甲虫類既報の整理 KINOKUNI(46):1-129
松野更一・伴 憲隆・穂積俊文(1990) 愛知県のコガネムシ 愛知県の昆虫(上):339-361
三宅義一(1957) 久重山系の鰓角群相 北九州の昆虫 4(1):1-12
三宅義一・日浦 勇・溝口 修・西岡靖夫(1958) 徳島県のこがねむし類 昆虫科学(7):3-33
三輪勇四郎・中條道夫(1939) 日本産鞘翅目分類図録 金亀子虫科(野田書房・台北)
水野弘造・細田偉市(1991) 鳳凰山産甲虫目録(山梨県韮崎市) 関西昆虫談話会資料 第二号 P. 53
中島義人(1968) 霧島山産昆虫目録 タテハモドキ(3):43-71
中村慎吾(1977) 広島県比和町とその周辺の昆虫類 比和の自然:255-294
T. Nakane(1954) A List of Coleoptera (Polyphaga) from Oze with Descriptions of Some New Spesies. Scientific Reseaches of the Ozegahara Moor pp. 727-740.
中根猛彦・馬場金太郎(1960) 新潟県の金亀子虫類 市立長岡科学博物館館報(4):1-9
中谷正彦(1993) 霧多布湿原の昆虫相 第4章 総括, 霧多布湿原の昆虫 Sylvicola 別冊:72-142
新島善直・木下栄次郎(1923) こがねむし二関スル研究報告(第二) 我国ニ産スルこがねむし及び其分布 北海道帝国大学農学部演習林研究報告 Vol. 2. No. 2
S. Nomura (1960) List of the Japanese Scarabaeoidea (Coleoptera). Toho Gakuho(10): 39-79.
野村 鎮(1963) 原色昆虫大図鑑第2巻(甲虫篇)(北隆館・東京)
小田脇康行・須安貞荘(1965) 高野町のコガネムシ類 比婆科学(67):19-21
大桃定洋ほか(1993) 茨城県のコウチュウ目 茨城県の昆虫:128(水戸市立博物館)
恩藤芳典・江原昭三(1974) 氷ノ山等中国山地国定公園・拡大予定地域の動物相 東中国山地自然環境調査報告:141-154
尾崎俊寛他(1992) 南八甲田山地(駒ヶ峯地区)の昆虫相 南八甲田山地総合学術調査報告書(駒ヶ峯地区):40-55

坂口精一(1989) 香川県産昆虫標本目録兼香川県産昆虫目録 (B5, 223p. 自刊)
桜井俊一(1984) 山形県の甲虫類(Ⅳ) 山形昆虫同好会会誌(13):13-25
佐々治寛之・斎藤昌弘(1985) 福井県の甲虫目 福井県甲虫目録:79-245
沢田玄正(1937) 十七ホシハナムグリの分布 日本の甲虫1(1):33
島 根 県(1995) 島根県の貴重野生動植物リスト p1-34
清水 薫(1969) 霧島山の昆虫 霧島山総合調査報告書 p237-284
多比良嘉晃(1989) 静岡県産コガネムシ科仮目録 静岡の昆虫 7(1/2):21-31
高羽正治(1992) 石川県産甲虫類初出文献一覧表 石川むしの会特別研究報告第6号. B5. 98p
高橋寿郎(1981) 兵庫県甲虫相資料・91 きべりはむし 9(1):32-33
高橋寿郎(1989) 広島県産甲虫類研究史概説 比婆科学(141):5-17
高橋寿郎(1989) 広島県産甲虫類に関する文献目録 比婆科学(141):18-39
高橋寿郎(1992) 伯耆大山のコガネムシに関する文献目録 すかしば(37/38):51-60
高橋寿郎(1993) 伯耆大山のコガネムシに関する文献目録 追加 すかしば(39/40):48
高橋寿郎(1994) 広島県のコガネムシに関する文献目録(Ⅰ－Ⅲ・追加) 比婆科学(159):43-50, (160):55-62, (161):33-43, (163):17-21
高橋寿郎(1995) 伯耆大山のコガネムシに関する文献目録(2) すかしば(41/42):11
高橋寿郎(1996) 伯耆大山のコガネムシに関する文献目録 追加(3) すかしば(43/44):60-61
高橋寿郎(1996) 鳥取県産コガネムシに関する文献目録 すかしば(43/44):53-60
高橋寿郎(1996) 岡山県産コガネムシに関する文献目録 未発表
高橋寿郎・淀江賢一郎(1996) 島根県のコガネムシに関する文献目録 すかしば(43/44):27-41
高倉康男(1989) 福岡県の甲虫相 B5. 526p. 自刊(葦書房・福岡)
竹下 富(1993) ハナムグリ雑記Ⅰ 北九州の昆虫 40(2):117-118
鳥飼兵治(1974) 飛騨高地の鞘翅目について 岐阜県の動物:190-206 岐阜高等学校生物研究会編
渡辺福寿(1937) 森林動物相調査報告 第一輯 金亀子科 鞘翅目
渡辺 徳(1989) 宮城県の甲虫(日本鞘翅学会)
C. O. Waterhouse(1875) On the Lamellicorn Coleoptera of Japan. Trans. Ent. Soc. London, 1875-Part. 1:71-116, pl. Ⅲ.
M. Wenhen(1995) Economic Insect Fauna of China, Fasc. 46. Coleoptera:Cetoniidae, Trichiidae and Valgidae 1995:1-210, 5pls.
山口博物館(1988) 山口県の昆虫
山地 治(1978) 岡山県より採集した甲虫類 すずむし(115):25-30
山谷文仁・草刈広一(1994) 上杉博物館館蔵昆虫目録(38) 甲虫目(コガネムシ科②) ファウナウキタム(39):286-296
山本雅則(1979) 伯母子岳とその周辺の甲虫 SAKAIENSIS 16(2):128-184
山本義丸(1952) 郷土・氷上郡の昆虫相について NaturaⅦ:8-13
山本義丸(1958) 兵庫県氷上郡昆虫目録. 氷上の自然第3集 Natura 特別号
山下善平ほか(1968) 平倉演習林の昆虫目録 三重大学農学部演習林資料:No. 1:1-94
山下善平ほか(1972) 大杉谷及び大台ヶ原山の昆虫相ならびに樹上クモ類相 大杉谷・大台ヶ原自然科学調査報告書 195-285p
矢野俊郎(1961) 四国産既知甲虫類目録Ⅲ(多食亜目) 松山昆虫同好会時報(16):1-20(ref. p. 19)
横山桐郎(1931) 続・日本の甲虫(西ヶ原刊行会・東京)